

加入国際学術団体に関する調査票

1 国際学術団体活動状況（内規第 11 条 活動報告）

団体名	和	国際理論応用力学連合
	英	International Union of Theoretical and Applied Mechanics (略称 IUTAM)
	団体 HP (URL)	http://www.iutam.net または http://www.iutam.org (日本学術会議が加盟していることの記載 <input checked="" type="checkbox"/> 有 ・ 無 )
国際学術団体における最近のトピック (学術の進歩、当該団体の推進体制の変化、国際機関・政府・社会との関わり方等)		理論応用力学は分野横断の研究領域であり、力学の基本であると同時に先端的研究に関する最新動向を俯瞰し、情報科学など異分野と協働して新たに開拓すべき次世代力学研究の学術的基盤である。学術分野の研究深化に加えて、社会の要請に合わせ、その対象はより広範かつ複雑にして挑戦的な問題へと変化を続けている。
当該国際学術団体が対応する分野において学術の進歩に貢献した事例		2024 年 8 月 25-30 日に ICTAM2024 (Daegu, Korea) <a href="https://www.ictam2024.org/">https://www.ictam2024.org/</a> が開催され、理論応用力学の学術の進歩に貢献した。 また 2023 年 12 月 25-26 日に IUTAM Symposium の一環として Dynamics and Interface Phenomena of Bubbles and Droplets at Multiple Scales が開催され界面の動力学の術の進歩に貢献した。
政策提言や世界の潮流になりそうな研究テーマ・研究方式・研究助成方式等		研究テーマはボトムアップによる提案が基本となっている。マルチスケール、機械学習、異分野融合など、新たな潮流と応用力学に今求められている先進的な研究領域のシンポジウム提案が生まれている。
日本人役員によるイニシアティブ事項や日本の参加によって進展や成果があった事例		界面動力学研究の発展を期して国際シンポジウムの開催を提案し、2023 年に東京にて、IUTAM Symposium on Dynamics and Interface Phenomena of Bubbles and Droplets at Multiple Scales を主催した。また、非線形動力学研究の発展を期して国際シンポジウムの開催を提案し、2023 年につくば市にて IUTAM Symposium on Nonlinear dynamics for design of mechanical systems across different length/time scales を主催を主催した。
当該団体に加入していることによる日本学術会議、学会、日本国民にとってのメリットや変化		国際理論応用力学連合 (IUTAM) が主題とする理論応用力学は、国民生活に直結する環境、防災安全、エネルギー分野などにおけるさまざまな現象や課題の解明・解決のための科学技術の中核をなす分野横断の学際的研究分野である。学術分野において幅広い研究の基盤をなすと同時に、産業界においても開発研究から実際の開発現場までを広く支えている。また理論、実験と並んで第 3 の科学と呼ばれる計算科学が関与する多くの分野で重要な役割を果たしており、「学術の大型施設計画・大規模研究計画に関するマスタープラン」において「理論応用力学研究拠点計画」もヒアリング対象となった。高度に情報化する社会との親和性が高いことが本連合の特徴でもある。IUTAM は歴史ある国際組織であ

	<p>り、日本では 1951年の IUTAM 参加と同時に、IUTAM の国内版とも言うべき第 1 回の理論応用力学講演会が開催された。同講演会は日本学術会議の主催で、物理、化学、建築、土木、機械、さらには航空宇宙や原子力、地盤工学や地震工学、自動車技術界といった基礎から応用までの主要学会 20 以上が共催となって開催されている。すでに 60 回を越える開催を積み重ねており、毎回 500 名以上の参加者を集める学際的な講演会として発展してきた。</p> <p>現在、日本学術会議 IUTAM 分科会がつなぎ役として IUTAM と国内理論応用力学講演会との連携を図っている。当該分野を世界的に主導する IUTAM に一定数の GA（総会委員）メンバーを送り、日本が国として主体的にその発展に尽力していくことは、世界における日本の存在感を示すとともに、IUTAM が主催する各種シンポジウムの日本開催などにもつながっており（2024 年の総会でさらに2件採択）、理論応用力学講演会を共催する学協会をはじめ幅広い分野の国内研究者、さらには産業界にとって大きなメリットがある。</p>
<p>その他（若手研究者・女性研究者育成法、科学者の倫理に関する当該国際学術団体の基本方針や憲章、資金提供ソースの発掘における画期的な方策等の特記事項など）</p>	<p>4 年毎に開催される ICTAM 国際会議では若手研究者の発表に対する褒賞や若手参加者に対する財政的支援などを行っている。</p>

## 2 今後の予定について（内規第 11 条 活動報告）

<p>総会、理事会の日本開催の予定（招致等の予定も含む）</p>	<p>2024 年 8 月に韓国で開催された IUTAM General Assembly (略称 GA:理事会)で 複数の IUTAM シンポジウムの日本開催が決定した。</p>
<p>日本人の役員立候補等の予定</p>	<p>2020 年 8 月の General Assembly (略称 GA)に日本学術会議から 4 名の GA メンバーが日本代表として出席し、新たに高木会員が Congress Committee (CC) メンバーに、岸本会員が理事に選出された。さらに、2024 年 8 月の GA において、岸本連携会員の理事としての重任が正式に議決された。この決定は、日本の学术界にとって極めて重要な意味を持つものであり、国際連合理論応用力学連合 (IUTAM) における日本のプレゼンスを一層高めるものとなった。これにより、日本は IUTAM 全体の方針策定において確固たる発言力を確保し、国際的な学术界の中で主導的な役割を果たす基盤を築いたといえる。すなわち、世界に向けて我が国が学術の未来を牽引するための、重要かつ不可欠な布石が打たれた。</p>
<p>現在、検討中の日本からの提言や推進するプロジェクト等の動き</p>	<p>2020 年に東京開催予定であった IUTAM シンポジウムの実行委員会体制が決まり準備を行った。併せて国内における 2022 年に理論応用力学講演会の開催（オンライン）と今後の国内講演会の継続性と IUTAM 総会招致にむけた学協会の連携体制の再構築を進めている。</p>

### 3 国際学術団体会議開催状況（内規第 11 条 活動報告）

総会・理事会・各種委員会等の状況 （過去5年間及び今後予定されているもの）	総会開催状況	2024 年 総会（開催地：Daegu, Korea） 2020 年 総会（開催地：Milan, Italy） 2016 年 総会（開催地：Montreal, Canada） 2012 年 総会（開催地：Beijing, China）		
	理事会・役員会等開催状況	2024 年 理事会・役員会（開催地：Daegu, Korea） 2022 年 理事会・役員会（開催地：Cambridge, UK） 2020 年 理事会・役員会（開催地：Milan, Italy） 2018 年 理事会・役員会（開催地：Boston, USA） 2016 年 理事会・役員会（開催地：Montreal, Canada） 2015 年 理事会・役員会（開催地：Stuttgart, Germany） 2014 年 理事会・役員会（開催地：Lyngby, Denmark） 2013 年 理事会・役員会（開催地：Montreal, Canada） なお、2020 年以降、理事会・役員会は上記以外にオンラインにて適時開催されている。		
	各種委員会開催状況	2024 年 コングレス委員会（開催地：Daegu, Korea） 2022 年 コングレス委員会（開催地：Cambridge, UK） この他、2022 年以降、ダイバシティ提唱委員会がオンラインにて適時開催されている。		
	研究集会・会議等開催状況	2024 年 ICTAM（開催地：Daegu） 2021 年 ICTAM（開催地：Milano） 2016 年 ICTAM（開催地：Montreal） 2013 年 IUTAM シンポジウム（開催地：福岡） 2012 年 ICTAM（開催地：北京）		
上記会議等への日本人の参加・出席状況及び予定	2024 年 IUTAM 理事会・総会 3名（うち代表派遣：坂上） 2024 年 ICTAM 国際会議（Daegu）日本人約 100 人参加 2021 年 IUTAM 総会（Milano）3名（うち代表派遣：佐野） 2018 年 IUTAM 総会（Boston）3名（うち代表派遣：佐野） 2016 年 ICTAM 国際会議（Montreal）日本人約 100 人参加 2016 年 IUTAM 総会（Montreal），若干名（うち代表派遣：佐野理） 2014 年 IUTAM 理事会（Lyngby），3名（うち代表派遣：佐野理） この他、理事会・役員会、コングレス委員会、ダイバシティ提唱委員会に参加・出席している。			
国際学術団体における日本人の役員等への就任状況（過去5年）	役職名	役職就任期間	氏名	会員、連携会員の別
	GA 委員*	2017～現在	菱田 公一	（25期） <u>会員</u> ・連携
	GA 委員	2011～2020	岸本 喜久雄	（25期） <u>会員</u> ・ <u>連携</u>
	GA 委員	2011～2022	西村 直志	（23期） <u>会員</u> ・ <u>連携</u>
	GA 委員	2013～2022	佐野 理	（24期） <u>会員</u> ・ <u>連携</u>
	GMM 委員*	2022～現在	坂上 貴之	（26期） <u>会員</u> ・ <u>連携</u>
	GMM 委員	2022～現在	亀田 正治	（26期） <u>会員</u> ・ <u>連携</u>
	GA 委員	（終身）～2022	巽 友正	（ 期） <u>会員</u> ・ <u>連携</u>
	CC 委員	2018～現在	高木 周	（26期） <u>会員</u> ・ <u>連携</u>
	CC 委員	2016～2024	藪野 浩司	（ 期） <u>会員</u> ・ <u>連携</u>
GMM 委員	2022～現在	堀宗朗	（26期） <u>会員</u> ・ <u>連携</u>	

	理事	2020～現在	岸本喜久雄	(25期) 会員・ <b>連携</b>
出版物	1 定期的 (年 1 回)	主な出版物名 Annual reports		
	2 不定期 ( )	主な出版物名 年 10 件ほどのシンポジウムプロシーディングが書籍として出版		
活動状況が分かる年次報告等があれば添付又は URL を記載				
1 国際学術団体の定款 (英文、あれば和文も) ( <a href="http://iutam.org/?page_id=447">http://iutam.org/?page_id=447</a> )				
2 国際学術団体の概要説明書 (歴史、現況等) ( <a href="http://iutam.org/history/photos-of-congresses/">http://iutam.org/history/photos-of-congresses/</a> )				
3 国際学術団体加入ナショナルメンバー一覧 ( <a href="http://iutam.org/a-propos/iutam-general-assembly/">http://iutam.org/a-propos/iutam-general-assembly/</a> )				
4 国際学術団体の分担金一覧 (各国別カテゴリー、金額一覧) ANUUAL REPORT2017 ( <a href="http://iutam.org/wp-content/uploads/2018/06/Annual-Report-2017.pdf">http://iutam.org/wp-content/uploads/2018/06/Annual-Report-2017.pdf</a> )				
5 国際学術団体の財務報告書 ANNUAL REPORT 2017 同上				
6 国際学術団体の機関誌、総会記録 (最近のもの) Annual Report 2017 同上				
7 その他加入による実績がわかる資料				

\* GA:GeneralAssembly 2024 から法人化に伴い GMM : General Meeting Member に改称

4 国際学術団体に関する基礎的事項（内規第3条、4条、5条）

国内委員会 (内規4条第3号)	委員会名	IUTAM・国際連携小委員会
	委員長名	山西 陽子
	当期の活動状況	<p>(開催日時 主な審議事項等)</p> <p>第一回 2023年11月14日 委員長等の選出、IUTAM シンポジウム参加へ向けた準備</p> <p>第二回 2024年3月15日 IUTAM シンポジウム提案準備、ICTAM2024 参加準備</p>
内規第3 (国際学術団体の要件関係)	<p>国際学術交流を目的とする非政府的かつ非営利的団体である</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 1. 該当する      2. 該当しない</p> <p>※根拠となる定款・規程等の添付又は URL を記載 (<a href="http://www.">http://www.</a> )</p>	
	<p>各国の公的学術機関及び学術研究団体等が国際学術団体に国を代表する資格を有して加入するものが、主たる構成員となっている（主たる構成員が、いわゆる「国家会員」であるか否か）</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 1. 該当する      2. 該当しない</p> <p>※根拠となる資料の添付又は URL を記載 (<a href="http://www.">http://www.</a> )</p>	
	<p>下記の事項（ア～エ）のいずれか一つに該当するか（該当するものに○印）</p> <p>ア 個々の学術の専門分野における統一かつ世界的な組織を有するもの</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> イ 研究の領域が複数の専門分野にわたるものであって、統一かつ世界的な組織を有するもの</p> <p>ウ 研究の領域が複数の専門分野にわたるものであって、ア又はイの国際学術団体を連合した世界的組織を有するもの</p> <p>エ 構成員のうち、各国代表会員がアジア地域等我が国が関係する地域等に限られるものであって、当該国際学術団体の研究の領域が複数の専門分野にわたるもの</p>	
	<p>10 カ国を超える各国代表会員が加入している</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 1. 該当する      2. 該当しない</p>	
	加入国数及び主要な各国代表会員を10記載	<p>( 48ヶ国)</p> <p>・各国代表会員名／国名                  (米国) The National Academy                  (英国) The Royal Society                  (仏国) Comité National Français de Mécanique、 Académie des Sciences                  (ドイツ) Deutsches Komitee für Mechanik                  (イタリア) Associazione Italiana di Meccanica Teorica ed</p>

	<p><b>Applicata</b>  (カナダ) The National Research Council of Canada  (ロシア) Russian National Committee on Theoretical and Applied Mechanics  (スウェーデン) Swedish National Committee for Mechanics  (中国) The Chinese Society of Theoretical and Applied Mechanics  (インド) National Committee for Theoretical and Applied Mechanics of the Indian National Science Academy</p>
--	--

(参考)

国内関係学協会 (主要 1 2 団体)

公益社団法人 日本工学会 理論応用力学コンソーシアム, 公益社団法人地盤工学会、公益社団法人土木学会、公益社団法人日本応用数理学会、一般社団法人日本風工学会、一般社団法人日本機械学会、公益社団法人日本気象学会、一般社団法人日本計算工学会、一般社団法人日本建築学会、一般社団法人日本原子力学会、一般社団法人日本航空宇宙学会